キャリア観形成への貢献を目指す英語科の創作表現活動カリキュラム

――学習経験者による対話型リフレクションから実践の意義と価値を見出す――

中　島　義　和

A Curriculum of Creative Expressive Activity in English Classes Aimed at Contributing to the Formation of Career Perspectives

――Finding Significance and Value in Practices through Interactive Reflection by Experienced Learners

NAKASHIMA Yoshikazu

Abstract

This paper introduces the practices of combining career education and creative expression activities in English classes at junior high schools.　In the English classes, activities with a simulated experience of various occupations were incorporated to make students aware of their future dreams, jobs, and occupations in a cumulative manner.　In order to explore the significance and value of the practices, the author conducted an interactive reflection conducted after a period of time with university students who had experienced these practices in their junior high school years.　The results suggest that the practices may have contributed to the formation of a career perspective in junior high school students.　This paper also discusses and reports on the significance of the interactive reflection conducted after a period of time.

キーワード：キャリア観形成：Career Perspective Formation，カリキュラム：Curriculum，創作表現活動：Creative Expressive Activity，対話型リフレクション：Interactive Reflections

1. は　じ　め　に

中学校英語科では，例えば『NEW HORIZON English Course 2』（東京書籍株式会社）の Unit 3 My Future Job（**図１**）や『NEW HORIZON Elementary English Course 6』（東京書籍株式会

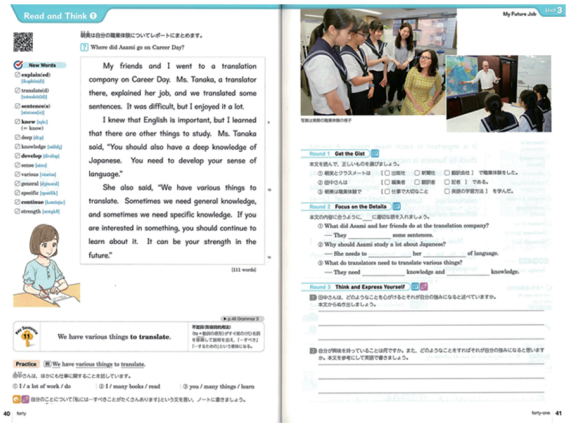


図１　『NEW HORIZON English Course 2』（東京書籍株式会社）Unit3 My Future Job

社）Unit 8 My Future，My Dream（図 2）に見られるように，将来の夢や仕事や職業体験をテーマとして，不定詞を用いて将来の夢を語る単元がある。筆者が中学校で教員をしていた際，夢がまだはっきりとしていないため本音で表現できない生徒を見かけていた。その度に，少しでも興味がある職業や仕事，夢があり，それを少しでも本音に近づけて表現できる生徒が増えることを望んでいた。学校によっては，職業体験を行事として組み込んでいるところもあるが，コロナ禍の影響で中止になったところも多かったようである。そこで，中学校英語科の授業の中で，積み上げ的に将来の夢や仕事・職業を意識するための足場かけができないかと考え，進路指導やキャリア教育的視点を意識した職業の疑似体験的要素のある創作表現カリキュラムを構想し，実践した。また，その学習を実際に中学生時代に経験した大学生と授業者の対話型リフレクションからその実践の意義と価値を探り，報告する。

図２　『NEW HORIZON Elementary English Course 6』（東京書籍株式会社）Unit 8 My Future, My Dream

2. 問 題 と 目 的

(1) 本研究に至る問題意識

筆者の中学校・高等学校での教諭経験から，将来の夢がない，はっきりしていない児童・生徒が気にかかっていた。また，大学生でも個人面談で「何をしたいかわからない」と悩んでいる学生が結構いる現状がある。特に，過去に勤務した教育困難校と言われる高等学校では，夢がない・わからないという生徒がとても多かった。これは，家庭環境や保護者の職業等も夢の有無に大きく影響を与える一因であるためと考えられる。

そして，前述したとおり，英語科の授業では将来の夢ややりたいことを英語で表現することを求める単元が見られるが，その際に，少しでも多くの児童・生徒・学生が，本当に興味があることを「本音で」表現してほしいという願いが筆者にはあった。その課題を解決すべく，職業を知る機会，興味を育てる機会をもっとつくれないだろうかという課題意識も持っていた。学校によっては，職業体験行事を実施しているところもあるが，コロナ禍で中止になったところもあり，その影響で現在も実施が難しくなっている学校もあるのが現状である。

(2) 目的

そこで，これらの問題意識や課題意識から，究極の目標としては，小学校の段階からキャリア教育・職業指導的要素を教科等の授業の中で，できることを扱っていけないだろうかという発想に至った。特に，本研究においては，中学校英語科の授業の中でも，積み上げ的に将来の夢や仕事・職業を意識したり，興味を持ったりする学習ができないだろうかと考え，授業を構想し，実践した。

以上により，本研究の目的（および方法）として，中学生の実態を鑑み（先行研究調査・実態調査），キャリア教育の要点を捉え（文部科学省によるキャリア教育の在り方研究），問題意識を解決するカリキュラムを報告・提案し（実践を進路指導・キャリア教育的視点で整理），その意義や価値を探る（学習経験者との対話型リフレクションにより検討）ことを設定した。

3. 先行研究から見る実態調査

(1) 子どもたちの将来の夢の有無に関する調査

①保護者を対象とした調査（図３）

現状を調査すべく，子どもたちが将来の夢を持っているのかについて，教員としての授業内

の感覚のみではなく，一般的に実施された調査についてあたった。

保護者を対象とした，菅公学生服株式会社の調査「カンコーホールムール～学生を読み解くデータ集～」vol. 196「子どもの将来の夢（2）」（2021）によると，将来に夢を「持っている」という小中高校生は全体では約５割で，子どもの将来の夢の有無について，小中高校生の子どもを持つ親の全体の回答は「持っている」（48.9％），「持っていない」（17.7％），「わからない」（33.4％）という結果になった。中学生に関しては，小学生・高校生に比べて将来に夢を「持っていない」の回答が多く２割を超えた。

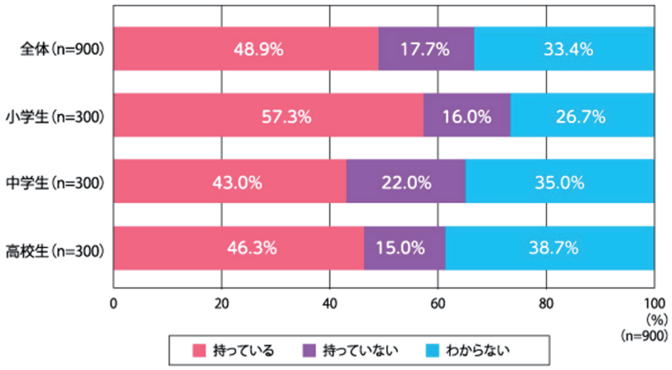


図３　〔保護者対象調査〕自分の子どもが将来に夢を持っているか　菅公学生服株式会社（2021）

校種別では，小学生は「持っている」（57.3％），中学生は「持っている」（43.0％），高校生は「持っている」（46.3％）となった。また，中学生に関しては，小学生・高校生に比べて将来に夢を持っている子どもが少なくなり，中学生は将来に夢を「持っていない」（22.0％）という回答が２割を超えた。

②子どもたちを対象とした調査（図４）

次に，子どもたちを対象として調査についてみていく。東進ハイスクール・東進衛星予備校を運営する株式会社ナガセがリリースした調査（2020）によると，学年別に将来の夢やなりたい職業がある割合を見ると，中１生の60.7％が何らかの将来の希望の職業があるが，中２，中３になるとその割合は減少していき，中３では46.3％と最も低くなる。そして，高校生になると少し「ある」の割合が上がり50％を超える。

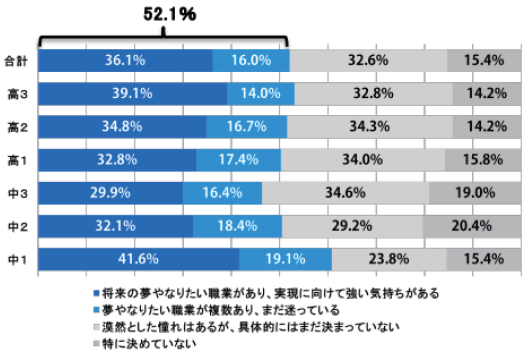


図４　〔子ども対象〕将来の夢やなりたい職業はあるか　株式会社ナガセ，東進ハイスクール・東進衛星予備校（2020）

③コロナ禍前後の推移（図５）

個人的関心により，コロナ禍の前後で変

化があったのかを調べたところ，株式会社やる気スイッチグループの調査（2021）（対象：未就学児～高校３年生までの580人）では，子ども全体の８割以上（83.4％）が「将来なりたい職業や将来の夢がある」と回答し，新型コロナウイルス感染症の拡大前（49.9％）と比べて３割以上も増加したとのことであった。その割合のうち，「ある」の割合は，小学生72.8％，中学生52.4％，高校生75.6％で，中学生が最も低かった。新型コロナウイルス感染症拡大前と比べると，具体的に「将来なりたい職業や将来の夢がある」と回答した子どもは，49.9％から83.4％に増加し，「将来なりたい職業や将来の夢がない」と回答した子どもは48.8％から12.9％に減少したようである。

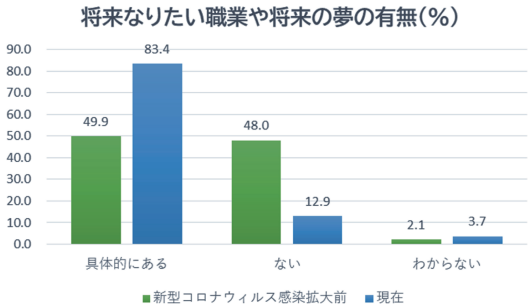


図５　〔子ども対象〕コロナ禍前後の将来の夢の有無の変化　やる気スイッチ株式会社（2021）

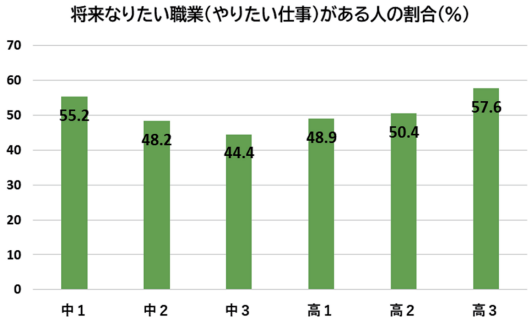


図６　〔子ども対象〕将来なりたい職業がある人の割合　東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所（2015）

調査の時期やタイミング，母集団の性質にもよるだろうが，概ね，**図６**に示した東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所が実施した「子どもの生活と学びに関する親子調査2015」（2015）による，将来なりたい職業ややりたい仕事が「ある」と答えた人の割合に示されるように，中学生では，学年が上がるにつれて「ある」人の割合が低下していき，高校生になると増加していく傾向が見て取れる。また，「ある」人の割合は中学校２・３年生ではおよそ半分に到達しない程度であると言えそうである。

4. 実　態　調　査

筆者は，2023年度の中学生及び大学生を対象に実態調査を行った。本調査は，先行研究による調査の結果と自身による調査の結果がどの程度類似するか，あるいは両者間にどの程度の相違が生じるかを検証するために実施した。

(1) 中学生を対象とした将来の夢があるかどうかの調査（図７・図８）

①西日本の中学校２年生対象調査（図７）

西日本の某国立大学法人の附属中学校２年生79名対象を対象に将来の夢を持っているか否かを調査したところ，「持っている」が71％（56名），「持っていない」が29％（23名）という結果であった。

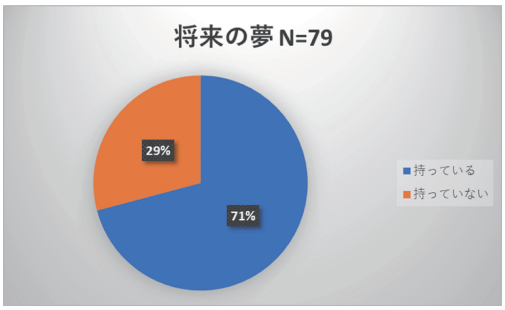


図７　〔中学生２年生対象〕将来の夢の有無の調査

②関東圏の中学校全校対象調査（図８）

関東圏の某国立大学法人の附属中学校１～３年生計303名対象を対象に将来の夢を持っているか否かを調査したところ，１年生（105名）では，「持っている」82％（86名），「持っていない」が18％（19名），２年生（100名）では，「持っている」が74％（74名），「持っていない」が26％（26名），３年生（98名）では，「持っている」が77％（75名），「持っていない」が23％（23名）という結果が得られ，学校全体（303名）では「持っている」が78％（235名），「持っていない」が22％（68名）となった。

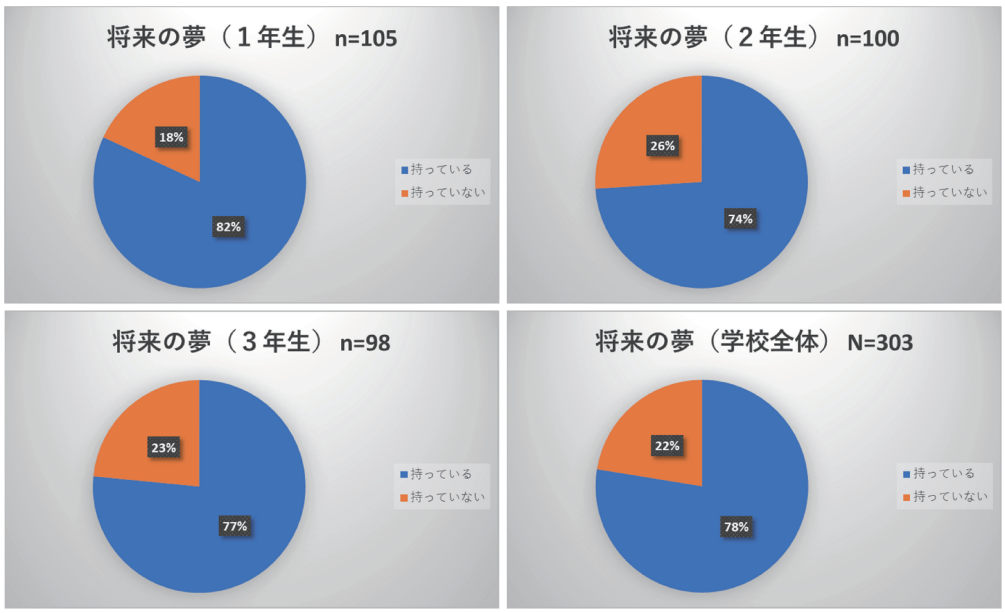


図８　〔中学生１～３年生対象〕将来の夢の有無の調査

(2) 大学生を対象とした調査（図９～図13）

西日本にある某私立女子大学の１年生～４年生47名を対象に質問紙調査を実施したところ，**図９**以降の各結果を得た。本調査は対象が女子大学生のみとなっているため，ジェンダーによる違いが生じている可能背があるかもしれない。

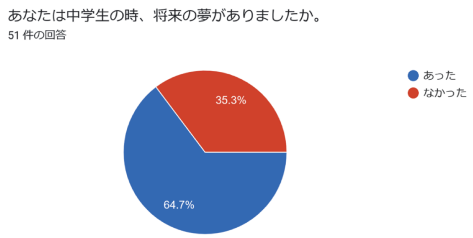


図９　〔大学生対象〕問１　中学生時代の将来の夢の有無

まず，問１では，およそ３分の１強の学生は中学生時代に将来の夢はなかったと回答している（**図９**）。

続いて，問２からは，中学生の時には夢があったが今はなくなってしまった学生や，中学生の時から夢がない学生もそれぞれおよそ５分の１ずつおり，全体の約４割が現在，将来の夢がないと回答しており，大学生になった現在も将来の職業選択において明確な希望やビジョンが見られない状況もある（**図10**）。

問３では，大学生になった今，中学生時代を振り返ってもらい，中学生の段階で将来の夢が持てない理由は，どこにあると思うか尋ねたところ以下の回答が得られた。この質問への回答から，職業を知っていても仕事内容のイメージがわかなかったことが要因の一つとして挙げられている（**図11**）。

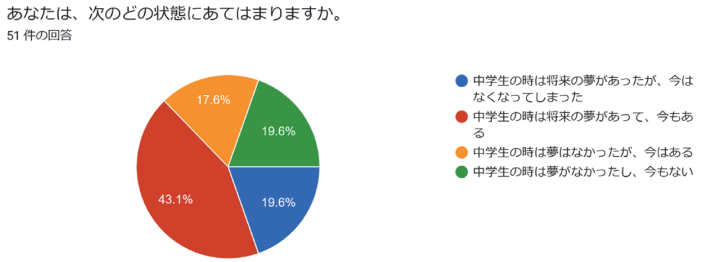


図10　〔大学生対象〕問２　現在の将来の夢の状況

さらに，問４では，どのような機会があれば中学生の段階で将来の夢を持ちやすくなったり，考えやすくなったりすると思うか尋ねた質問に対しては，以下の回答が得られた。この質問に対しては，多くの学校で実施されている職業体験行事の他に，授業の中で知る

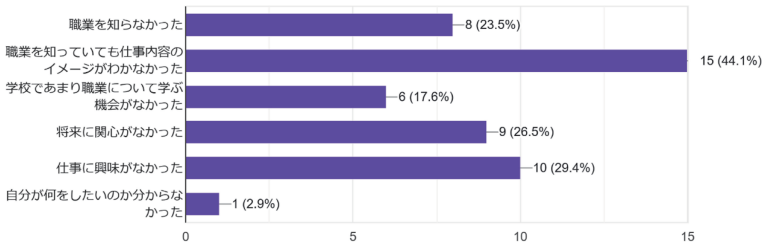


図11　〔大学生対象〕問３　大学生の今考える，中学生の段階で将来の夢を持てない理由

機会や体験する機会を持つことが回答として多くの学生により選択されていることがわかる（**図12**）。

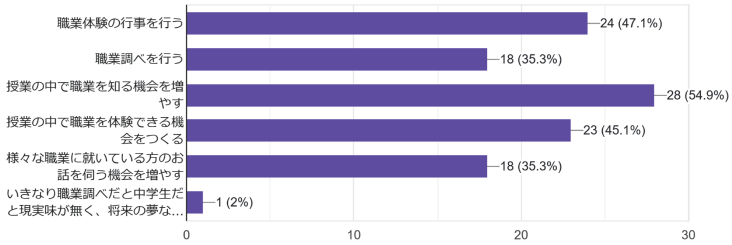


図12　〔大学生対象〕問４　中学生の段階で将来の夢を持てるようにする機会

また，問５として，自分が中学生の時に行われていた職業指導やキャリア教育について，実際どのような形で行われていたのか尋ねたところ，以下の結果が得られた。この回答から，職業体験行事と職業調べが圧倒的に多く経験されていることがわかる。一方で，授業の中での知る学習や体験的な学習は少ないこともわかる（**図13**）。

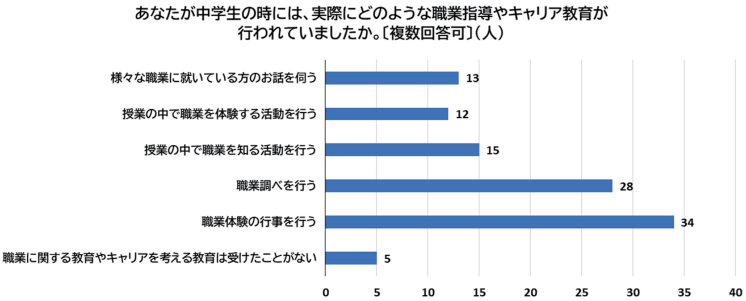


図13　〔大学生対象〕問５　中学生の時に行われていた職業指導やキャリア教育

5.　キャリア教育概観

本章では，キャリア教育について概観する。

(1)　キャリア教育とは

キャリア教育に関しては，中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）（2011年１月）において，「一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す教育」と言っている。また，キャリア教育においては，幼児期の教育から高等教育まで，発達の段階に応じて体系的に実施されるべきであり，様々な活動を通じて，基礎的・汎用的能力を中心に育成するとしている。同答申においては，キャリア発達にかかわる諸能力として「４領域８能力」や「基礎的・汎用的能

力」が示されているが，ここではその対応関係も示す（**図14**）。

さらに，同答申では，これらの能力は，包括的な能力概念であり，必要な要素をできる限り分かりやすく提示するという観点でまとめられたものであり，この４つの能力は，それぞれが独立したものではなく，相互に関連・依存した関係にあるという。このため，特に順序があるものではなく，また，これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものでもないとされている。

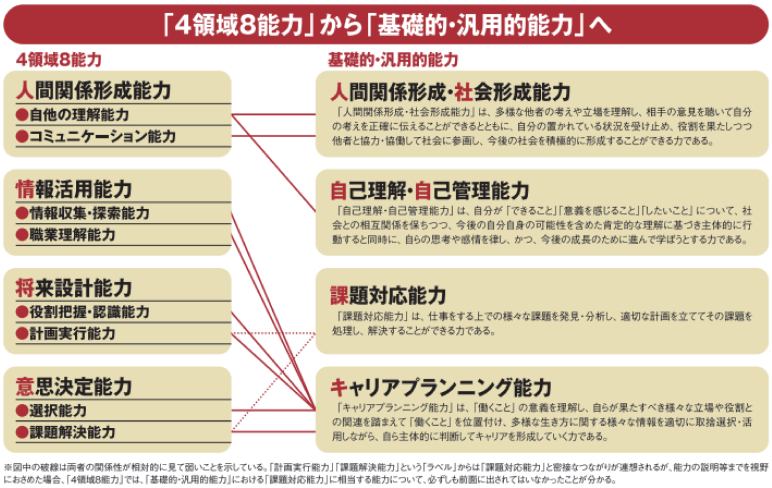


図14　「４領域８能力」から「基礎的・汎用的能力」へ　文部科学省国立教育政策研究所（2011）

そして，これらの能力をどのようなまとまりで，どの程度身に付けさせるかは，学校や地域の特色，専攻分野の特性や子ども・若者の発達の段階によって異なると考えられる。各学校においては，この４つの能力を参考にしつつ，それぞれの課題を踏まえて具体の能力を設定し，工夫された教育を通じて達成されることが望まれる。その際，初等中等教育の学校では，新しい学習指導要領を踏まえて育成されるべきであるとされている。

(2) 中学校におけるキャリア教育とは

前述の答申や文部科学省「中学校キャリア教育の手引」（2011年３月）によると，中学校におけるキャリア教育の意義と課題は以下のようにまとめられよう。

①キャリア教育の意義

・中学校においては，社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等についてしっかり考えさせるとともに，目標を立てて計画的に取り組む態度を，体験を通じてその重要性について理解を深めさせつつ育成し，進路の選択・決定へと導くことが重要である。
・各学校においては，キャリア教育の視点で，各教科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動や日常生活におけるそれぞれの活動を体系的に位置付けることにより，能力や態度の効果的な育成を図ることが必要である。

・職場体験活動は，ある職業や仕事を暫定的な窓口としながら実社会の現実に迫ることが中心的な課題となる。その際，活動の効果をより引き出すための指導の改善・充実や，円滑に実施するための条件整備を図ることが必要である。
・活動の目標やこれを達成するための道筋・手だてを明確なものとし，適切に評価されることを考慮した指導が重要である。例えば，事前指導として，職場体験学習の意義や体験先の仕事内容に関する学習，体験先訪問，また，事後指導として，生徒が成就感・達成感を感じられるよう，自己評価カード作成や体験感想文作成，体験発表会等がある。
・中学校においては，「学ぶことや働くことの意義」等についての学習や体験的な学習が広く行われるようになっており，生徒がより主体的かつ真剣に自らの進路を考え，目的意識を持って進路選択を行うようになってきている。しかし，進路指導についての中学校の教員と生徒や保護者の認識の差も大きくあり，教員は，生徒や保護者が個性や適性を考える学習を望んでいるという認識を持って，組織的・計画的に進路について指導・援助することが必要である。

②キャリア教育の背景と課題

・子どもたちが育つ社会環境の変化に加え，産業・経済の構造的変化，雇用の多様化・流動化等は，子どもたち自らの将来の捉え方にも大きな変化をもたらしている。子どもたちは，自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見つけにくく，自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことも容易ではなくなっている。
・環境の変化は，子どもたちの心身の発達にも影響を与え始めている。例えば，身体的には早熟傾向にあるが，精神的・社会的側面の発達はそれに伴っておらず遅れがちであるなど，全人的発達がバランス良く促進されなくなっている。具体的には，人間関係をうまく構築できない，自分で意思決定できない，自己肯定感をもてない，将来に希望を持つことができないといった子どもの増加などが指摘されている。
・子どもたちが希望をもって，自立的に自分の将来を切り拓いて生きていくためには，変化を恐れず，変化に対応していく力と態度を育てることが不可欠である。そのためには，日常の教育活動を通して，学ぶ面白さや学びへの挑戦の意味を子どもたちに体得させることが大切である。
・子どもたちが，未知の知識や体験に関心をもち，仲間と協力して学ぶことの楽しさを通して，未経験の体験に挑戦する勇気とその価値を体得することで，生涯にわたって学び続ける意欲を維持する基盤をつくることができる。
・子どもたちが将来自立した社会人となるための基盤を作るためには，学校の努力だけではなく，子どもたちにかかわる家庭・地域が学校と連携して，同じ目標に向かう協力体制を築くことが不可欠である。

(3) 各教科等と関連づけたキャリア教育

キャリア教育は，総合的な学習の時間や道徳，特別活動（学校行事）としての職業体験として実施されることが多いようであるが，本稿の目的である教科等との関連についてみていきたい。文部科学省国立教育政策研究所生徒指導研究センター「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」（2011年３月）を参考にすると，以下のことが考えられる。

・キャリア教育は，すべての教育活動を通して実践されるものであるが，生徒一人一人の「生き方」に直接働きかける「道徳」「総合的な学習の時間」「特別活動」は，特に重要な実践の場となる。
・道徳：「主として自分自身に関すること」「主として他の人とのかかわりに関すること」「主として集団や社会との関わりに関すること」等を柱として，「道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め，道徳的実践力を育成する」ことを目標としている。これらの内容が特にキャリア教育との関連が深いと言える。

・特別活動及び学級活動：特別活動は，「望ましい集団活動を通して，心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り，集団や社会の一員としてより良い生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的な態度を育てるとともに，人間としての生き方についての自覚を深め，自己を生かす能力を養う」ことを目標とする。学級活動は，「適応と成長及び健康安全」と「学業と進路」等を内容とする。これらがキャリア教育の中核的な実践の場となる。
・総合的な学習の時間：「横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して，自己の生き方を考えることができるようにすること」を目標とする。各教科，道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け，学習や生活において生かし，それらが総合的に働くようにすることが重要であり，各教科等で別々に身に付けた知識や技能をつながりのあるものとして組織化し直し，改めて現実の生活にかかわる学習において活用し，それらが連動して機能するようにすることが求められている。

(4) キャリア教育の課題

キャリア教育は，特定の活動や指導方法に限定されるものではなく，様々な教育活動を通して実践される。この点について，2011年１月にとりまとめられた中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」は次のように指摘している。

キャリア教育は，現在の学校教育を見直す理念を示すものであることから，その活動は特定の新しい教育活動を指すものではなく，学校教育全体の活動を通じて体系的に行われる必要があり，特に，子ども・若者が実社会を体験し，それを基に自ら考える活動が不可欠である。しかし，「新しい教育活動を指すものではない」としてきたことにより，従来の教育活動のままでよいと誤解されたり，「体験活動が重要」という側面のみをとらえて，職場体験活動等の実施をもってキャリア教育を行ったものとみなしたりする傾向が指摘されている。
（※下線部は筆者による）

以上の下線部に，２点の問題が提示されている。従来の教育活動のままで良いという誤解と職場体験活動を行えばそれでよいという認識である。キャリア教育ではあくまでも，各教科，道徳，総合的な学習の時間及び特別活動が，それぞれ社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力としての「基礎的・汎用的能力」の育成にどのように貢献できるのかを考え，実践に移すためには，まず学習指導要領に示される各教科等とキャリア教育との関連性について正しく理解し，その上で，各教科等の特質と単元や題材などの内容を生かした創意・工夫が必要となる。また，各教科等における取組は，相互に関連性を持たないままでは効果的な教育活動とはなりにくいことから，取組の一つ一つについて，その内容を振り返り，相互の関係を把握させたり，それを適切に結びつけさせたりしながら，より深い理解へと導くような取組も強く期待されており，各教科等の学習との関連づけや相互往還的な創意・工夫による効果的な教育活動が求められていると言える。

各教科等をキャリア教育と関連づけて行うことを促すものや実践例等が示されている（**図15**）。本研究では，英語という教科の活動をキャリア教育の視点から関連づけて報告したい。特に，

子どもたちが創作表現活動を通して職業の疑似体験ができる仕掛けについて実践を報告し，その実践についての学習経験者の対話型リフレクションでその意義や価値を検討したい。

以下の**表 1** は，外国語（英語）科の視点からキャリア教育に取り組む際の指導内容例を示した

図15　「教科でも進めよう！キャリア教育」

表 1　「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する外国語（英語）科の指導内容の例（文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年 3 月より）

「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する外国語(英語)科の指導内容の例

学年／能力	言語活動としての話題	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
第1学年	自分の気持ちや身の回りの出来事などの中から，簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り上げる。	＜聞くこと＞ ・まとまりのある英語を聞いて，概要や要点を適切に聞き取ること。 ＜話すこと＞ ・聞いたり読んだりしたことなどについて，問答したり意見を述べ合ったりすること。	＜聞くこと＞ ・質問や依頼などを聞いて適切に応じること。 ＜読むこと＞ ・伝言や手紙などの文章から書き手の意向を理解し，適切に応じること。	＜話すこと＞ ・与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。 ・つなぎ言葉を用いるなどの工夫をいろいろして，話を続けること。	＜読むこと＞ ・書かれた内容や考え方などをとらえること。 ＜書くこと＞ ・感想，賛否やその理由を書いたりすること。 ・聞いたり読んだりしたことなどについて，自分の考えや気持ちなどを書くこと。
第2学年	事実関係を伝えたり物事について判断したりした内容などの中から，コミュニケーションを図れるような話題を取り上げる。	発達の段階に応じた高度化			
第3学年	様々な考えや意見などの中から，コミュニケーションを図れるような話題を取り上げる。				

外国語(英語)科の学習は，各学年の学習段階に応じて，適切な言語活動場面の設定のもと有効な言語材料を活用し，コミュニケーションを図っていくものです。ある意味，キャリア教育の発達の段階における目標設定は，言語活動における学習段階を考慮した配慮事項と密接に関連しています。このように，外国語(英語)科の学習を実践していく上で，キャリア教育の視点(『基礎的・汎用的能力』の視点)を組み込んでいくことは，将来，社会的自立・職業的自立を目指す子どもたちにとっては，とても重要なこととなります。

ものである。

表 1 からもわかるが，キャリア教育というものが特別なものではなく，例えば，各教科等の学習過程において，グループで協働的に課題を解決する学習を設定することで，他者とつながる力である「人間関係形成能力」や動く／生かす力である「課題対応能力」等の能力を培うことができるし，グループでの活動において時間制限等の条件やルールを設けることで自己を見つめる力である「自己管理能力」を鍛えることも可能であろう。

広島県教育委員会（2008）『キャリア教育実践の手引き』では，キャリア教育の注意点として，以下の 5 つのポイントを提示している。

ア　組織的・計画的に
教育課程に位置付け，関連する諸活動を体系化し，学校の教育活動全体を通して進める。
イ　系統的・発展的に
幼児児童生徒の発達段階を踏まえ，キャリア発達にかかわる能力・態度の到達目標を明確にし，取組の適時性や系統性・発展性に配慮して進める。
ウ　個に応じて
幼児児童生徒一人一人のキャリア発達の状況を的確に把握し，個人差に留意しながら進める。
エ　連携・協力して
家庭，地域社会，企業，関係機関等の理解を得て，その資源を有効に活用して進める。
オ　実践的・体験的な学習活動を通して
働くこととの接点を広げる実践的・体験的な学習活動を多面的に展開し，経済社会，職業や仕事についての具体的で現実的な理解を深めながら進める。

さらに，文部科学省（2017）『中学校学習指導要領 総則』「第 4 生徒の発達の支援 1 生徒の発達を支える指導の充実」では，「(3) 生徒が，学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう，特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて，キャリア教育の充実を図ること。その中で，生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう，学校の教育活動全体を通じ，組織的かつ計画的な進路指導を行うこと」とある。学習指導要領では，キャリア教育実践の在り方として，小学校・中学校・高等学校共通で，以下の 3 点を示している。

(1) 学級・ホームルームや学校における生活づくりへの参画
(2) 日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全
(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現

そして，その内容の取扱いとして，(3) の指導に当たっては，学校，家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て，学んだことを振り返りながら，新たな学習や生活への意欲につなげたり，将来の生き方を考えたりする活動を行うことと，その際，児童／生徒が活動を記録し蓄積する教材等（=「キャリア・パスポート」）を活用することを示している。

以上から，道徳や総合的な学習の時間，特別活動や職業体験行事のみならず，各教科等での

キャリア教育の重要性を，また，大学生質問調査の回答にもあったように，授業中で職業を知る，あるいは疑似的に体験する活動の必要性も認識し，本研究にてカリキュラムを構想し，実践したものを報告する。

本研究の目的は，これまでの基礎実態調査やキャリア教育の概要を踏まえ，英語科の授業の中で，少しでも現実の社会や世界に即したオーセンティックな活動が展開できるよう，またその体験を通して進路指導と関連付けてキャリア観を形成するための英語科創作表現カリキュラムを提案することにある。

表２　進路指導・キャリア教育的視点で構想・実践した英語科の創作表現のカリキュラムと４つの基礎的・汎用的能力との関係

	学習単元	学習活動内容	想定する主な関連職業例	学習活動単位	ア：人間関係形成・社会形成能力	イ：自己理解・自己管理能力	ウ：課題対応能力	エ：キャリアプランニング能力
中1	○英語自分新聞づくり	自分のことを知ってもらうための新聞を英語で作成する。	新聞記者、雑誌編集者、デザイナー、写真家	個人		◎		
	○エコ絵本づくり	エコな材料を使用して英語の絵本を制作する。ストーリーに1つの人生への教訓を入れる。	絵本作家、作家、アーティスト、環境問題研究家	個人			◎	
	○クラスオリジナル番組制作	10のジャンルの番組・CMからなるクラスで1つのオリジナル番組を制作する。	アナウンサー、気象予報士、俳優、タレント、料理研究家、テレビ局員（カメラマン、プロデューサー）、映画監督、脚本家	グループ・クラス	◎	○		
中2	○ニュース番組制作	アメリカの生徒に向けて日本（東京）が抱える問題と解決策について考え、英語でのニュース番組に仕上げる。	アナウンサー、キャスター、専門家、カメラマン、ディレクター、プロデューサー	グループ・クラス			◎	○
	○平和新聞づくり	平和をテーマとした新聞を制作し、クラスで1冊の本に仕上げる。	新聞記者、研究者	個人		○	◎	
	○紙芝居づくり	美術科との教科等横断授業。グループを紙芝居制作会社に見立て、紙芝居を制作する。毎回の授業はリーダーが指導案を作成して進める。	翻訳家、通訳、絵本作家、クリエイター、保育士、幼稚園教諭、会社員、実業家、教員、カメラマン、クリエーター、アーティスト	個人・グループ・クラス	○	○	○	◎
	○伝記づくり	図書館司書の先生とコラボ授業。各自で自分が「生き方」を尊敬できる人物について、工夫をした伝記を制作する。	図書館司書　漫画家　文筆家	個人		○	○	◎
	○パンフレット（観光マップ）制作	オススメしたい場所の観光パンフレットを制作する。	旅行会社、出版社、写真家、文筆家、エッセイスト、記者	個人		○	◎	
	○演劇創作	グループで演劇を1本創作し、発表会を行う。	劇団員、俳優、美術制作、脚本家、アーティスト、監督	グループ・クラス	◎		○	○
	○自分たちで創る英語表現発表会（歌・詩・劇）	クラスで英語の歌の合唱、詩の吟唱、劇（クラス内オーディション優勝グループ）の発表会を自分たちで創り上げる。毎回の授業はリーダーが指導案を作成し、進める。	教員、文学者、音楽家、イベント企画、作家、司会者、演劇映画監督、俳優、カメラマン	グループ・クラス	◎	○	○	○
	○生徒が創る授業	生徒が学習指導案を作成、1時間の授業を担当する。	中学校・高等学校英語科教諭	個人		◎	○	○
中3	○修学旅行記作成	修学旅行のレポートを、修学旅行に行っていない人にその魅力が伝わるように、英語でポスターの形に仕上げる。	旅行会社、写真家、文筆家、エッセイスト、記者、旅人	個人		◎	○	
	○日本紹介番組制作	オーストラリアの生徒を対象に、日本の良さを伝え、紹介する映像を制作する。グループごとにテーマを決めて演じる。	アナウンサー、気象予報士、俳優、タレント、料理研究家、テレビ局員（カメラマン、プロデューサー）、映画監督、脚本家	グループ・クラス	○		◎	
	○*We Are the World* PV制作	クラスごとに*We Are the World*のPVを制作する。USA for Africaのメンバーになりきり、彼らの体験の追体験を目指す。	アーティスト、ヘアメイクアーティスト、アパレル、ミュージシャン、監督、カメラマン、編集、クリエイター、ディレクター	個人・クラス	◎	○	○	○
	○平和エッセイ集制作	授業を通して考えてきた「平和」「人権」をテーマとしてエッセイを書く。学年生徒分を1冊の本にまとめる。	エッセイスト、作家、平和研究家、出版社	個人		○	○	◎
【大学での応用】	キャリア・スタディ・プログラム	自分が興味がある職業になりきって、修学旅行の設定で1年間の学習の総括映像を制作する。	キャビンアテンダント、教員、ツアーコンダクター	個人・クラス	○	○	○	◎
【中3】実践したかったこと（構想と途中まで）	○職業の魅力紹介動画作成	3年間かけた職業疑似体験の視点で職業の魅力発信映像を制作する。1/2年生の「総合的な学習の時間」で行った職業調べを活用し、さらにその職業に就いて検討を深める。また、その職業に就いている方にインタビューなどもさせていただいたり、職業体験での経験について述べるなどもできる。 **①英語で職業を説明する** 関係代名詞の活用　A doctor is a person who…. **②その仕事になるためには何が必要かを考えて説明する** 不定詞目的、名詞的用法 You need to go to university to get a teaching license to be a teacher. **③どんな人に向いていると思うかを理由とともに伝える** 接続詞 that, because I think that a nurse is good for the person who… because ….		個人・グループ・クラス		○		◎

6. カリキュラムの実際

本章では，進路指導・キャリア教育的視点に基づいて構想し，実践した英語科の創作表現のカリキュラムの実際を示す。中学校３年間で，生徒ができるだけ多様な職業の要素を含む学習活動を経験し，生徒のキャリア観の形成に直接的・間接的問わず貢献するであろうと考えられる学習を整理した。また，それぞれの学習活動と活動を通して育成したい基礎的・汎用的能力「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の関連性も示した。詳細は**表２**に示す。

表２に整理した学習活動を協働型の学習と個人型の学習で分類すると，以下のようになる。なお，各実践の詳細は，中島（2011・2012・2013・2015・2018・2021・2023），中島・樫葉（2021）を参照されたい。

■協働的課題解決型の学習活動

○クラスオリジナル番組制作（**写真１**）　○ニュース番組制作
○紙芝居づくり　○演劇創作　○日本紹介番組制作
○ *We Are the World* PV 制作　○自分たちで創る英語表現発表会（歌・詩・劇）

写真１　クラスオリジナル番組制作の様子

■個人思考・表現型の学修活動

○英語自分新聞づくり　○エコ絵本づくり　○伝記づくり（**写真２**）
○パンフレット（観光マップ）制作　○生徒が創る授業　○修学旅行記作成（**写真３**）
○平和新聞づくり　○平和エッセイ集制作（**図16**）

本稿では，中２で実施した「紙芝居づくり」（中島，2018；2021）と中３で実施した「We Are the World PV 制作」（中島，2012）に焦点を当てる。なお，次章以降の対話型リフレクションの省察対象もこの２つの実践に焦点を当てるものとする。以下，両実践について概要を示す。

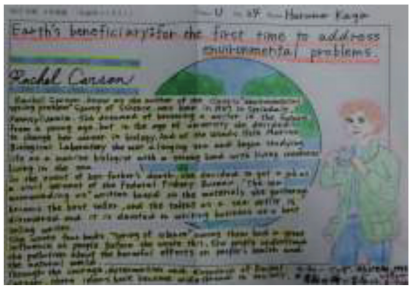
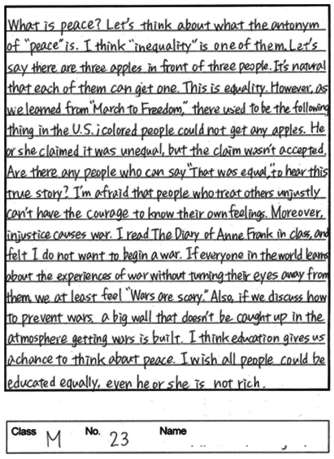


写真２　伝記づくりでの図書館司書による講義・作成した伝記

写真３　修学旅行記作成の様子・作成した旅行記



What is peace? Let's think about what the antonym of "peace" is. I think "inequality" is one of them. Let's say there are three apples in front of three people. It's normal that each of them can get one. This is equality. However, as we learned from "March to Freedom," there used to be the following thing in the U.S. i colored people could not get any apples. He or she claimed it was unequal, but the claim wasn't accepted. Are there any people who can say "That was equal," to hear this true story? I'm afraid that people who treat others unjustly can't have the courage to know their own feelings. Moreover, injustice causes war. I read The Diary of Anne Frank in class, and felt I do not want to begin a war. If everyone in the world learns about the experiences of war without turning their eyes away from them, we at least feel "Wars are scary." Also, if we discuss how to prevent wars, a big wall that doesn't be caught up in the atmosphere getting wars is built. I think education gives us a chance to think about peace. I wish all people could be educated equally, even he or she is not rich.

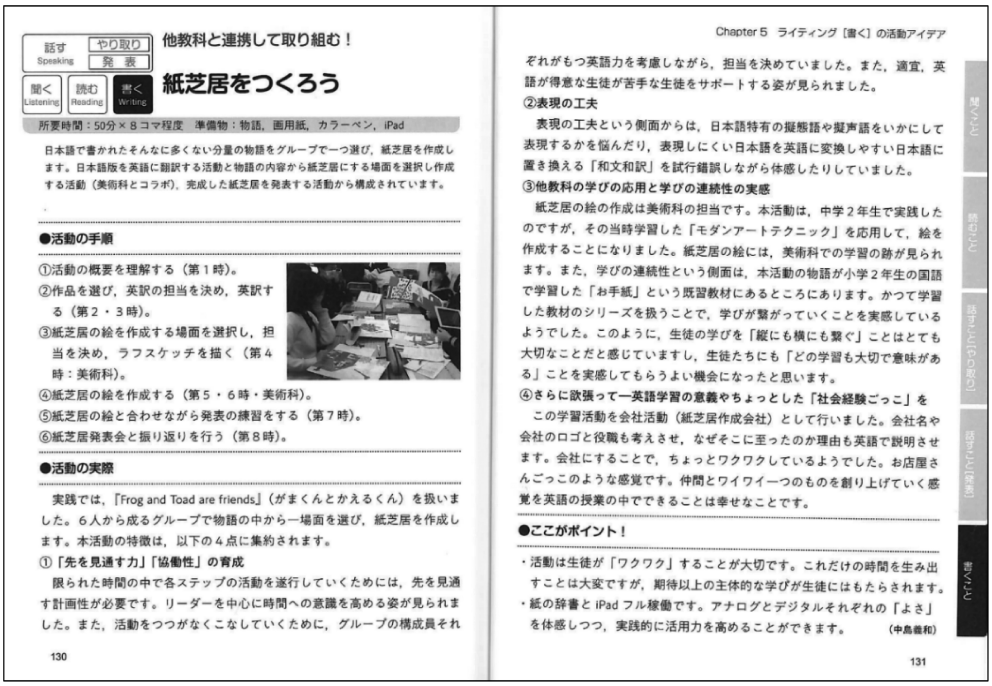
Class M　No. 23　Name

図16　平和エッセイ集

■「紙芝居づくり」

『がまくんとかえるくん』の物語を英訳し，美術科の授業ではその紙芝居を作り，録画し，電子データとして，幼稚園児や小学生に見てもらう。生徒主体の協働的な活動として，グループ

写真４　紙芝居づくりの活動の様子



話す Speaking　やり取り　発表
聞く Listening　読む Reading　書く Writing

他教科と連携して取り組む！

紙芝居をつくろう

所要時間：50分×８コマ程度　準備物：物語，画用紙，カラーペン，iPad

日本語で書かれたそんなに多くない分量の物語をグループで一つ選び，紙芝居を作成します。日本語版を英語に翻訳する活動と物語の内容から紙芝居にする場面を選択し作成する活動（美術科とコラボ）。完成した紙芝居を発表する活動から構成されています。

●活動の手順

①活動の概要を理解する（第１時）。
②作品を選び，英訳の担当を決め，英訳する（第２・３時）。
③紙芝居の絵を作成する場面を選択し，担当を決め，ラフスケッチを描く（第４時：美術科）。
④紙芝居の絵を作成する（第５・６時・美術科）。
⑤紙芝居の絵と合わせながら発表の練習をする（第７時）。
⑥紙芝居発表会と振り返りを行う（第８時）。

●活動の実際

実践では，『Frog and Toad are friends』（がまくんとかえるくん）を扱いました。６人から成るグループで物語の中から一場面を選び，紙芝居を作成します。本活動の特徴は，以下の４点に集約されます。

①「先を見通す力」「協働性」の育成

限られた時間の中で各ステップの活動を遂行していくためには，先を見通す計画性が必要です。リーダーを中心に時間への意識を高める姿が見られました。また，活動をつつがなくこなしていくために，グループの構成員それぞれがもつ英語力を考慮しながら，担当を決めていました。また，適宜，英語が得意な生徒が苦手な生徒をサポートする姿が見られました。

②表現の工夫

表現の工夫という側面からは，日本語特有の擬態語や擬声語をいかにして表現するかを悩んだり，表現しにくい日本語を英語に変換しやすい日本語に置き換える「和文和訳」を試行錯誤しながら体感したりしていました。

③他教科の学びの応用と学びの連続性の実感

紙芝居の絵の作成は美術科の担当です。本活動は，中学２年生で実践したのですが，その当時学習した「モダンアートテクニック」を応用して，絵を作成することになりました。紙芝居の絵には，美術科での学習の跡が見られます。また，学びの連続性という側面は，本活動の物語が小学２年生の国語で学習した「お手紙」という既習教材にあるところにあります。かつて学習した教材のシリーズを扱うことで，学びが繋がっていくことを実感しているようでした。このように，生徒の学びを「縦にも横にも繋ぐ」ことはとても大切なことだと感じていますし，生徒たちにも「どの学習も大切で意味がある」ことを実感してもらうよい機会になったと思います。

④さらに欲張って一英語学習の意義やちょっとした「社会経験ごっこ」を

この学習活動を会社活動（紙芝居作成会社）として行いました。会社名や会社のロゴと役職も考えさせ，なぜそこに至ったのか理由も英語で説明させます。会社にすることで，ちょっとワクワクしているようでした。お店屋さんごっこのような感覚です。仲間とワイワイ一つのものを創り上げていく感覚を英語の授業の中でできることは幸せなことです。

●ここがポイント！

・活動は生徒が「ワクワク」することが大切です。これだけの時間を生み出すことは大変ですが，期待以上の主体的な学びが生徒にはもたらされます。
・紙の辞書と iPad フル稼働です。アナログとデジタルそれぞれの「よさ」を体感しつつ，実践的に活用力を高めることができます。　（中島義和）

聞くこと　読むこと　話すこと［やり取り］　話すこと［発表］　書くこと

130　131

図17　「紙芝居づくり」について整理した記事（中島，2021）

の活動を紙芝居制作会社に見立てた。社長などの役職，会社名，ロゴなども考えさせ，その決定の根拠なども英語で表現する学習も行った（**写真４**，**図17**）。

■「We Are the World PV 制作」

USA for Africa によるチャリティーソング

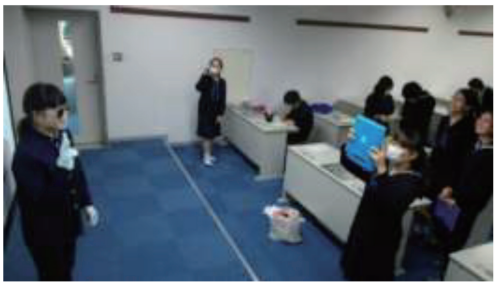


写真５　**PV** 制作の活動の様子

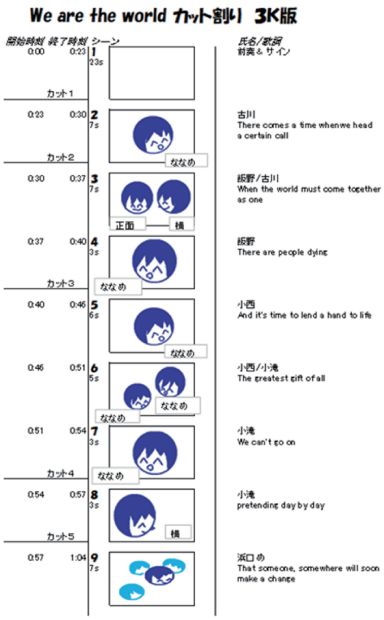


図18　カット割り

図19　導入の映像

写真６　卒業式前日の学年全体での試写会

「We Are the World」のクラスオリジナルプロモーションビデオを制作する（**写真５**）。学校教育目標「自主自立・広い視野」の体現を目指すべく，すべて生徒主体で計画を立て，カット割り（**図18**），映像制作・編集（**図19**）まで行い，完成した作品を提出した。完成した映像は卒業式の前日の試写会にて学年全員で視聴した（**写真６**）。最高の卒業記念制作となった。

7. 研　究　方　法

本研究では，進路指導・キャリア教育的視点で実践する「紙芝居づくり」と「We Are the World PV 制作」の２つの英語科創作学習の意義と価値について検討する。

(1) 対象

学習経験者大学２年生２名（**写真７**），授業者（筆者）

写真７　中学生当時のワークシートを振り返りながら語る学習経験者の大学生

(2) 方法

対話型リフレクションで，筆者がいくつかの問いを投

げかけ，それに関して本人たちが持参した当時のワークシートが閉じられたファイルを見ながら，自由に語ってもらう。対話型リフクションでの語りから抽出されたキーワードに意味づけを行い，本実践における意義や価値を質的に探る。

8. 結　　果

対話型リフレクションで得られた発話から，学習経験者の成長実感に関連する部分を抽出し，コーディングと基礎的・汎用的能力での分類を施したものが**表 3** である。

表 3　対話型リフレクションで得られた発話から学習経験者の成長実感に関連する部分を抽出し，コーディングと基礎的・汎用的能力での分類を施したもの

No.	活動	対象者の発言（抽出）	コーディング	基礎的・汎用的能力
1	紙芝居	「他の人と関わることが多かったから、協調性とか協働性が身についた」	協働性	ア：人間関係形成・社会形成能力
2	紙芝居	「自分だけわかればいい、じゃなくなった」	他者意識	ア：人間関係形成・社会形成能力
3	紙芝居	「人によっていろんな差があることがわかった」	他者理解	ア：人間関係形成・社会形成能力
4	紙芝居	「発表とか人に見せる、見てもらうから質を高めるようになってった」	他者意識	ア：人間関係形成・社会形成能力
5	紙芝居	「表現の相手が変わると、伝え方も変わることを学んだ」	他者意識	ア：人間関係形成・社会形成能力
6	紙芝居	「メンバーの得意とか苦手とか考えて仕事を割り振ることができるようになった	他者理解	ア：人間関係形成・社会形成能力
7	紙芝居	「周りとの役割分担がスムーズになっていった」	協働性	ア：人間関係形成・社会形成能力
8	紙芝居	「よい雰囲気で活動ができるように気を遣うようになった」	他者意識	ア：人間関係形成・社会形成能力
9	紙芝居	「自律的に、計画的に進めるようになった」	自己管理能力	イ：自己理解・自己管理能力
10	紙芝居	「期限から逆算して見通しをもって計画的にやるようになった」	計画性	ウ：課題対応能力
11	紙芝居	「作業の順番、道のり、段取りを考えるのがうまくなった」	計画性	ウ：課題対応能力
12	紙芝居	「自分たちのグループが何ができていないのか見えるようになって、改善しようとした」	課題解決力	ウ：課題対応能力
13	紙芝居	「グループで滞ってたり遅れてたりする人とか問題とかに関わってどうにかしようとするようになっていった」	課題解決力	ウ：課題対応能力
14	紙芝居	「授業でやったことが今とか将来の夢につながってる」	職業観	エ：キャリアプランニング能力
15	紙芝居	「活動が楽しくて、英語への抵抗感がなくなって、映画を字幕で観たり、洋楽を聞くようになったり、歌詞を日本語と英語で比較したりするようになった」	自己の変化	エ：キャリアプランニング能力
16	PV	「他者への干渉の仕方を学んだ」	協働性	ア：人間関係形成・社会形成能力
17	PV	「自分単独でやるんじゃなくて、他と歩みをそろえて連携することが大事だって思った」	協働性	ア：人間関係形成・社会形成能力
18	PV	「自分ができることとかしたいことを活かして活動に取り組めて、楽しかった」	自己理解	イ：自己理解・自己管理能力
19	PV	「学校教育目標（自主自律・広い視野）を常に意識してた」	自己理解	イ：自己理解・自己管理能力
20	PV	「各部署とクラス全体の進み具合とか見ながら、リーダーとして計画的に進むように意識した」	自己管理能力	イ：自己理解・自己管理能力
21	PV	「活動の人数が6人→15人→30人って大きくなっていったので、全員に情報を共有・周知するのが難しくなっていった分、工夫するようになった。	組織運営力	ウ：課題対応能力
22	PV	「やりたい仕事で部署をつくって組織化したのが、会社みたいでおもしろかった」	職業観	エ：キャリアプランニング能力
23	PV	「メイクとか、普段やっちゃいけないことを学校でできて、将来その道に進みたい人が生き生きしてて楽しかった」	職業観	エ：キャリアプランニング能力
24	PV	「自分の将来と直結しなくても、経験することで役立つことが得られた」	自己の成長	エ：キャリアプランニング能力
25	PV	「この活動はいろんな職業が絡んでたから、なりたい形を見つける手がかりになってた」	職業観	エ：キャリアプランニング能力
26	PV	「クラス全体での活動だっかたら各部署を決めて、その役職の人と連携をとってうまくやれた」	組織運営力	エ：キャリアプランニング能力
27	PV	「希望が多くて、希望の役職に就けなくてもやってみると意外と楽しくて、興味が出た」	職業観	エ：キャリアプランニング能力

9. 考　　察

今回のリフレクションでは，大学生になった当時の学習経験者による授業・活動の振り返りを行った。当時のワークシートを見ながら，記憶や当時の感覚がより鮮明に思い出されたようである。本人たち曰く，「自分たち生徒主体で進めたから，記憶に残っている」とのことであった。前章で示した抽出した発話をコーディングしたものを，キャリア教育の「分野や職種にかかわらず，職業的・社会的自立に向けて必要な基盤となる能力」として，以前は「4領域8能力」と呼ばれていたものを再構成した「基礎的・汎用的能力」の観点で分類することができ，一連の活動が進路指導やキャリア教育の一部をなす職業を知る・体験する学びを創出することが示唆された。

今回は「紙芝居制作」と「We Are the World の PV 制作」に焦点を当てたが，紙芝居制作の方は6人の紙芝居会社という限られた設定であったため，その6人での物語の英語翻訳や紙芝居の絵作り，撮影に向けての語りの練習等，人間関係が密であったため，「人間関係形成・社会形成能力」に関する発話が多く導出されたものと考えられる。それに対して，PV 制作の方はクラス全体での色々な役割から構成される活動であったため，より「キャリアプランニング能力」の育成を示唆する発話が多く引き出されたものと考えられる。

発話のコーディングにより，協働性，他者意識，他者理解，自己管理能力，計画性，課題解決力，職業観，自己の変化，自己理解，組織運営力，自己の成長の各コードが抽出されたが，これらを3つの視点〔自己・他者・社会〕から分類すると，以下のようになる。

1）自己に関する資質・能力：自己理解，自己管理能力，自己の変化，自己の成長
2）他者との関わりに関する資質・能力：協働性，他者意識，他者理解，組織運営力
3）社会で活用できる汎用的な資質・能力：計画性，課題解決力，職業観

表2で示した個人での学習活動も含め，中学校3年間を通して，進路指導やキャリア教育的視点で英語科の学習活動を継続的に反復的に行う試みには，以上のような資質・能力の育成に貢献する意義があると考える。

10. 成 果 と 課 題

(1) 成果

①意義

進路指導やキャリア教育的視点での英語科の学習活動の意義だが，大学生の質問紙調査での

「このようなキャリア教育があればよかった」項目での「授業の中で職業を知る・体験すること」や，現在のキャリア教育における課題点として挙げられていた「従来の教育活動のままで良いという誤解」と「職場体験活動を行えばそれでよいという認識」を満たす可能性がある点である。日々の，３年間の英語科の学習活動，特に表現創作の活動において，職業的要素をちりばめることで，職業の一端を知ることや疑似的ではあるが体験することにつながる。また，従来の教育活動のままではなく，少しの工夫や仕掛け・仕組みを創ることで可能となり，職業体験活動のみに終わることもない。

②価値

また，本実践の価値としては，学習経験者の大学生の語りからも見出せたように，キャリア教育で育成したい「基礎的・汎用的能力」と関連付けられるところにある。自己・他者・社会で活用されうる基礎的で汎用的な能力の形成の可能性が示唆される。

子どもたちは発達段階による差はあるにせよ，幼い頃から慣れ親しんだ，いわゆる「ごっこ遊び」にはワクワクした感覚を持ち合わせているようである。小学校低学年のお店屋さんごっこから高校生や大学生の文化祭・学園祭における模擬店に至るまで，である。そのような要素のある活動を英語科の中で取り入れることにより，将来夢がない，やりたい職業がないという生徒たちが少しでも職業を知ったり，疑似的に体験して職業にふれたりする中で，色々な職業をもつ人や店員になりきる，演じることはちょっと面白いと感じる価値が見いだせたり，その職業に興味を持つきっかけを得たり，関連する職業を知りたいという「動機づけ」のスパイラルに生徒を誘うことにもつながり得る。道徳教育で言われる着ぐるみを着させることで，想像力をふくらませてその職業の魅力や大変なことなどに思いを寄せたりすることは，視野を広げるきっかけにもなり得る。たとえその段階までに至らなくても，このような活動を通して，個人として，集団として身につけられる資質や能力は多様に見出される。これらの点から本実践における意義や価値を見出したい。

そして，今回実施した対話型リフレクションのように，時を経て振り返ることで当時の学びが今にいかにつながっているのか，そして中学生当時の学びに価値が生まれ，彼女たち曰く「当時の学びの意図が理解できた」「自分の学びの思い出をアップデートする良い機会」「学びが大学生の今生きている感じがある」等の発話を引き出すことができた。筆者にとって，初めての研究手法であったが，授業者である筆者と学習体験者である大学生が対話を通して過去の経験に意味づけをしていく過程は，授業者にとっては授業改善の視点を得たり，授業づくりに活かせるヒントを得たりする機会となるし，学習経験者にとっては自身の学びへの意味づけや価値づけとともに，学びの継続性や連続性といった今に活かされている感覚を持てたのは収穫のよ

うであった。また，このような機会を経て，新たな視点の広がりや深まりも感じられたようであった。この点にとって，この方法は意義深く，本研究の成果であると考える。

(2) 課題

「一人一人のキャリア形成と自己実現」のための指導に当たっては，学校，家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て，学んだことを振り返りながら，新たな学習や生活への意欲につなげたり，将来の生き方を考えたりする活動を行うこと，その際，児童／生徒が活動を記録し蓄積する教材等（=「キャリア・パスポート」）を活用することが求められる。

近年学校では，「キャリア・パスポート」の作成が求められており，筆者も中学校教諭としての勤務時代にその担当として，キャリア・パスポート作成・運用の業務を行ったことがある。なかなか積極的かつ充実した活用に至っていない学校も多いようではあるが，GIGA スクール構想の実施やコロナ禍により一人１台のタブレット所有も大いに進んだことであろうし，e-ポートフォリオの形で，教科での学習内容も含めた「キャリア・パスポート」が完成されるべきではないかと課題として捉えている。こういったものを活用しながら，他の教科等や特別活動，総合的な学習／探究の時間，道徳とも関連を図りながら，本実践をより豊かにすることが理想である。

また，対話型リフレクションの意義から，時を経て振り返るという活動を行うことで，学びの経験の価値や意義が本人に実感され次の学びへの動機となり得ると考えられる。したがって，「時を経た対話型リフレクション」を充実させるために，参加者確保・対話に参加する人数に関する問題の改善やシステム・方法の構築に尽力していきたいと考える。

引用・参考文献

アレン玉井光江・阿野幸一・濵中紀子ほか（2020）.『NEW HORIZON Elementary English Course 6』（小学校外国語科用 文部科学省検定済教科書）. 東京書籍株式会社

笠島準一・阿野幸一・小串雅則・関典明ほか（2021）.『NEW HORIZON English Course』1，2，3（中学校英語科 令和3年度版 文部科学省検定教科書）. 東京書籍株式会社

株式会社ナガセ，東進ハイスクール・東進衛星予備校（2020）.
https://www.toshin.com/news_release/uploadFiles/NewsReleases/2787cd6245fb095a8e8c9ac604c13daeb7df284b2893fbc9fcda424551570a6420200828215101.pdf（2023年6月18日閲覧）

菅公学生服株式会社（2021）.「カンコーホールムール～学生を読み解くデータ集～」vol. 196「子どもの将来の夢（2）」

中央教育審議会（2011）.「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所（2015）.「子どもの生活と学びに関する親子調査2015」

中島義和（2011）.「表現の工夫を意識させる授業づくり―『表現する力』の育成を目指して」『お茶の水女子

大学附属中学校研究紀要』第40集，55–76
中島義和（2012）.「表現する力の育成と学校教育目標を意識した活動―生徒たちが自ら創り上げる英語発表活動を通して」『お茶の水女子大学附属中学校研究紀要』第41集，73–100
中島義和（2013）.「『考える』英語の授業を創る―『平和・人権』をテーマとして」『お茶の水女子大学附属中学校研究紀要』第42集，55–65
中島義和（2015）.「コミュニケーショントピックとしての『日本』を知り，考え，発信する英語科授業の開発―ESD の視点から―」『お茶の水女子大学附属中学校研究紀要』第44集，1–26
中島義和（2018）.「実践事例 中2英語『英語紙芝居制作会社～英語翻訳に挑戦！美術科ともコラボ！～』」『平成30年度 お茶の水女子大学附属中学校 教育研究協議会 研究紀要「多様性を尊重する学校を目指して～帰国生一人ひとりを支える・生かす・伸ばす～（第8回帰国生教育研究協議会）および協動的な課題解決を支える思考・判断・表現の力を育てる授業づくり～新教科コミュニケーション・デザイン科の開発～＊文部科学省研究開発学校指定（延長指定）」』147–148
中島義和・樫葉みつ子（2021）.「汎用的な能力の育成を目指した協働的な学習活動の試み―英語科の活動を通して―」『中学教育（広島大学附属東雲中学校研究紀要）』第50号，29–42
中島義和（2021）.「紙芝居をつくろう」浅野雄大・芹澤和彦編著『中学校・高等学校4技能5領域の英語言語活動アイデア』明治図書，130–131
中島義和（2023）.「『ノシアック』プロセスを意識したカリキュラム構想と実践―英語科の授業と総合的な学習／探究の時間・特別活動をつなげる視点で―」『広島女学院大学人文学部紀要』第 4 号，31–54
広島県教育委員会（2008）.『キャリア教育実践の手引き』
文部科学省（2011）.『中学校キャリア教育の手引』
文部科学省（2017）.『中学校学習指導要領（平成29年告示）』
文部科学省国立教育政策研究所（2011）.『キャリア教育を創る』，p. 15
やる気スイッチ株式会社（2021）．https://ict-enews.net/2021/12/27yarukiswitch/（2023年6月18日閲覧）